

〔書 評〕

「菱田信彦『快読「赤毛のアン」』

(彩流社, 2014年, 216頁)』

軽 部 恵 子

著書の菱田信彦は、川村学園女子大学の文学部国際英語学科教授で、現在は学科長を務める。研究分野は、イギリス小説、英米児童文学、児童文学理論で、中でも児童文学作品における階級、ジェンダー、人種表象について注目している（川村学園女子大学、教員紹介、菱田信彦、http://www.kgwu.ac.jp/faculty/kyoin/bungaku/kokusai_hishida.html, 2015年12月14日アクセス）。『ハリー・ポッター』と『ナルニア国ものがたり』のシリーズも、著者の研究対象である。

冒頭に述べるとおり、本書はL.M. モンゴメリーの名作『赤毛のアン』をあらゆる角度から解説している。「まえがき」は、『赤毛のアン』が初めて刊行された1908年の意義をカナダの歴史や社会の視点で解説する。前年の1907年、カナダは主権を持つ英国の自治領としての地位を付与された。1926年のバルフォア報告書で、カナダはイギリス本国と対等の地位にあることが認められた。1931年のウェストミンスター憲章で、カナダは正式な独立国となる。著者によると、最初の『赤毛のアン』から最後の『炉辺荘のアン』（1939年刊）まで、『赤毛のアン』と続編の執筆時期は、カナダが独立国としての地位を獲得する道なりと重なっており、モンゴメリーはイギリス的な文学作品を書くことによって、カナダが文化的な国であるとアピールしたのではないかと著者は推測する。

Part I は、『赤毛のアン』を章ごとに文字通り徹底的に解説する。リンド夫人、マシュー、マリラなど、主要登場人物の何気ない台詞を通じて、たとえばフランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の対立関係が描き出される。アンの名前は、旧約聖書の「サムエル記」に登場する預言者サムエルの母、ハンナ (Hannah) に由来すると言う。ヘブライ語で「恵み」(grace) を意味する名前で、聖母マリアの母アンナも同源である。一方、マリラ (Marilla) はケルト系の名前で、「輝く海」(shining sea) を意味すると言う。アンは隣人バーリーの池を「輝く湖水」(The Lake of Shining Waters) と名付けたが、なにやら意味深長である。このほか、アンが両親のことをマリラたちに話すくだりから、イギリス階級の制度とカナダの階級意識を対比させるなど、著者の博識ぶりは枚挙に暇がない。

Part II は、「『赤毛のアン』を取り巻く社会」と題して、海外の研究者の論考を引用しながら解説する。『赤毛のアン』を女性の視点で読み直した時、注目されるべきは、『赤毛のアン』におけるジェンダーの概念がきわめて曖昧で複雑な点であると言う。アンは、農作業を男の子の仕事として手伝わない。そもそも、カスバート家が引き取りたかったのは、農作業を手伝える男の子であった。一方、アンは、女の子らしくしようと努力するが、失敗も多い。親友のダイアナに誤ってワインを飲ませて酔っ払わせ、バーリー夫人に出入禁止にされてしまった。あこがれのアラン牧師夫妻のために開いた茶会では、直前にひどい風邪を引き込み、香料のバニラと間違え痛み止め薬を入れたケーキを供してしまった。クイーン学院では、ギルバートと学業で一番を争い、レッドモンド・カレッジに4年間通える奨学金を獲得する。そして、最後にマシューが心臓発作で亡くなり、視力が衰えたマリラのために、奨学金を辞退し、家にとどまってマリラの世話をしながら、アヴォンリーの村で教員を務める決心をする。今風に言えば、介護のため名誉ある奨学金を辞退し、故郷にとどまった。著者は、このよう

菱田信彦『快読「赤毛のアン」』

にジェンダーの複雑なメッセージは、作者モンゴメリーの意図であったと主張する。

このパートでは、アンの階級とエスニシティも論じられる。再び、フランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の対立が説明される。アンの両親の名字「シャーリー」(Shirley)は、イギリス伯爵家を想起させるが、『赤毛のアン』は孤児アンの貴種流離譚で、モンゴメリーは人の資質は血筋によって決まると考えていたと言う。評者は子どもの頃から何度も『赤毛のアン』を読んできたが、そこまで考えを巡らすことはできなかった。また、調べようにも、本書ほど適切な文献は存在しなかったであろう。

Part II は、日本における『赤毛のアン』の人気をポップカルチャーとして分析する。日本人はあまり知らないかもしれないが、海外ではなぜ日本で『赤毛のアン』が人気なのか、それ自体が研究対象となっている。著者は、複数の仮説を丁寧に紹介している。もっとも、評者にはどの仮説もあまり納得できなかったのだが。各仮説の詳細は、本書を読む人の楽しみにとっておきたい。

1952年に村岡花子が初めて邦訳して以来、何人もの文学者・翻訳家がこの作品を日本語にした。40-50歳代の人気を支えるのは、1979年にフジテレビ系「世界名作劇場」で放映されたアニメ「赤毛のアン」であろう。高畑勲監督の本作は、掛川恭子の邦訳に依拠し、原作の物語を忠実に再現している。アニメの作画の技術が高く、菓子作りの場面とできあがった菓子の画像が楽しい。また、プリンスエドワード島の風景などが美しく、同島に日本から多数の観光客を誘う大きな理由となった。オーケストラによる背景音楽の演奏が、想像の翼を広げるアンの心象風景を鮮やかに描いている。テレビ局を変えて何度も放映されたので、見た人も多いであろう。

Part III は、『赤毛のアン』を翻訳した複数の本を、重要なパートごとに比較解説する。日本で最も読まれている翻訳は村岡花子のものだが、意外

に誤訳かとも思える箇所が散見される。村岡はカナダのメソジスト系のミッション・スクールに通っていたが、詳しい歴史的背景を調べられないのは仕方なかった。

評者にとって、本書で最も参考になったのは、アン、マシュー、マリラたちが信仰する長老派（改革派教会。presbyterian）の説明が各所に加えられていることである。2017年は、ルターの宗教改革から500周年となる。ルターの改革を不十分と批判し、さらなる改革を推し進めたのが、フランス出身のカルヴァンであった。カルヴァンは、人間が救済されるかはあらかじめ決まっているとする予定説を唱え、現在の仕事にいそむよう説いた。予定説は資本主義が発展する上で、精神的基盤となった。その教えはヨーロッパ中に広まり、フランスでユグノー、イングランドでピューリタン（清教徒）、スコットランドでプレスビテリアン（長老派）と呼ばれた。英国教会の首長ジェームズ1世の迫害を逃れたピューリタンがアメリカ東海岸に入植したが、教養人が多く、新聞の創刊、ハーヴァード大学の設立を行った。彼らの活動が1776年のアメリカ独立につながったのは言うまでもない。アン、マシュー、マリラの会話を基に、著者が長老派の考え方を懇切丁寧に解説したことで、カスバート兄妹の質素な暮らしぶり、虚栄を排除する態度、アン の 勤 勉 ぶ り の 理 由 を 納 得 す る こ と が で き た 。

以上、日本人になじみの深い『赤毛のアン』も、階級、ジェンダー、エスニシティに造詣の深い著者の手にかかる と、カナダの解剖を見るようで、知らなかったことが続出である。著者の博識ぶりに心からの敬意を表すると同時に、とくに『赤毛のアン』のファンには本書を強く薦めたい。